



豊かな河北潟に
夢のある干拓地に

NPO法人河北潟湖沼研究所通信

かほくがた



「七豊米」と「すずめ野菜」inロハスフェスタ

昨年から河北潟の南の小さな田んぼで、殺虫剤も除草剤も使わない農薬不使用のお米を作っていますが、今年はこのお米を「七豊米」と名付け、販売を始めました。そしてチクゴスズメノヒエを利用した「すずめ野菜」、こちらももちろん農薬を使わず栽培し、お米とともに直売所やネットショップで販売しています。

この七豊米とすずめ野菜を持って9月28日、29日と東京都練馬区光が丘公園でおこなわれたロハスフェスタに参加してきました。環境に配慮したスタイルのイベントで、販売するものも環境に配慮して生産したものや手作りの品などが求められます。その一画に出展し、農薬不使用の取り組みや河北潟についての展示とともに、七豊米とすずめ野菜を販売してきました。

買ってくださった方は、特に「農薬不使用」を喜ばれ、環境に配慮した栽培方法について評価してくださる方も多く、取り組みについて「頑張ってください！」と応援してくださる方もいらっしゃいました。味についても、イベント一日目に買った野菜がとてもおいしかったと、二日目も続けて買いに来てくださった方もおり、いろいろな嬉しい声を直接聞くことができました。こうしてイベント終了前には米も野菜も完売しました。

CONTENTS

ロハスフェスタ	番匠尚子	1p
河北潟の仲間たち・30 「セイタカアワダチソウ」	高橋 久	2p
-シリーズ干拓前後の河北潟- 〈干拓地編〉 私の見た河北潟干拓地の30年(9)	大串龍一	3p
潟びと・中野一二三さん	高橋奈苗	4p
泥んこ・ずぶぬれ・稲刈り奮闘記	田崎和江	6p
コラム「お米ができるまで」	番匠尚子	7p
〈お知らせ・活動案内〉		8p

Vol. **19-2**
2013年12月28日

第30回 セイタカアワダチソウ



セイタカアワダチソウは、秋の河北潟でいちばん目立つ植物です。見事な黄色い花が一面に広がる様子を、わざわざ写真撮影に来る人もいます。すっかり日本の秋になじんでいるこの植物ですが、実は北アメリカ産の外来植物です。日本国内へは明治時代の末期に入ったようです。しかし、全国に急速に広がったのは第二次世界大戦後に、アメリカ合衆国からの物資が入るようになってからともいわれています。細かい種子が風に乗って拡がり、いったん定着すると深く根を張り、地下茎から株で増えていき、アレロパシーと呼ばれる他の植物の種子の発芽を抑制する物質を生産します。

干拓が終わり干陸から農地造成期になり、だんだんと乾いていった河北潟干拓地に、このセイタカアワダチソウが大量に繁茂したようです。そして、現在でも休耕地や堤防沿いに大群落を形成しています。肥沃な土地を好むということで、河北潟では高さは2mを超え、簡単には群落の中に分け入ることはできません。いったん純群落ができると、人だけでなく他の植物もなかなか入り込めません。

そうして、かつて全国的にこの植物の繁茂が問題となりましたが、地下にあった栄養分を使い果たしたり、また自ら放出したアレロパシー物質により自らも衰退してしまった結果、小さくなったり他の植物に置き換わったりした場所もあり、かつてほどは問題とはなくなりました。しかし、外来生物法により要注意外来生物に指定されているほか、日本生態学会によって日本の侵略的外来種ワースト100にも選ばれています。

このセイタカアワダチソウ、河北潟ではまったく衰える気配がありません。河北潟はとんでもなく肥沃な土地のようです。花粉症アレルギーの犯人のように扱われていますが、本当は虫媒花で花粉を飛ばしたりはしません。濡れ衣を着せられながらも、ミツバチやハナアブの命を育んでいます。そんないいところもあるのですが、日本の昔の秋の風景であるススキやオギの銀色の群落を甦らせようと、セイタカアワダチソウの抜き取りの活動をおこなっています。しかし、いくら抜いても地下茎がちぎれて残ってしまい、なかなか絶えることがありません。せっかくですから、抜き取った植物を何とか利用しようと、紙に漉き込んだり、簾にしてみたりと活用の取り組みも始めています。河北潟自然再生まつりでは、毎年、セイタカアワダチソウ抜き取り大会を行っています。そうしたこともあって、会場のこなん水辺公園ではだんだんとセイタカアワダチソウが少なくなってきました。

(文 高橋 久)

私の見た河北潟干拓地の30年（9）

大串 龍一

河北潟干拓地のネズミは、 いまどうなっているのか

私は1976年から河北潟干拓地でネズミやモグラ類（まとめてネズミ類とする）を中心として動物とその生態を調べてきた。

私が調査している30年余りの間に干拓地の景観も動物も大きく変わった。最初の頃の疎らに草が生えた広い湿原は、成長したマツの防風林帯に囲まれたムギ畑・ダイズ畑や牧草地となり、牛舎やビニールハウスが建ち並んで、40年前の景色はもう古い写真と私たちの記憶の中に残っているだけである。

干拓地の環境と農業は、その景色や生物相とともにこれから変わってゆくだろう。ここでネズミ類と農業の関係などを中心に、これからの問題をまとめておこう。

2003・2004年の資料から、主な環境タイプとそこで捕獲したネズミ類をまとめると表1のようになる。



干拓地の中央に出来た大きな施設「ゆうきの里」 2001年



畑や牧草地になる前の干拓地は、ハタネズミとハツカネズミを主とした草原のネズミの世界だった。1977～79年には一時的にドブネズミが大発生したこともある。

それが大きく変わってきたのはアカネズミの定着と増加である。

アカネズミは内灘砂丘の防風林などには以前から住んでいたが、干拓地には1990年頃まではほとんどいなかった。それが1990年代から急激に増加した。この時期には干拓地の周りと幹線道路沿いに植えられたマツの防風林が成長して立派なマツ林になり、森のネズミにて適した環境になったのである。捕獲数を見てもハタネズミやハツカネズミは減っているのにアカネズミの数は目立って増えて、2003年にはネズミ類全体の75%、2004年には90%をアカネズミが占めるようになった。調査法による若干の誤差を考慮しても河北潟干拓地のネズミが1970～80年代のハタネズミ・ハツカネズミ主体からアカネズミ主体に変わったことは確かである。

この干拓地のネズミの種の変化によって、河北潟の農業のネズミ対策は新しい時期に入った。

表1. 河北潟干拓地の環境タイプとそこで採集したネズミ類

	ハタネズミ	ハツカネズミ	アカネズミ	ドブネズミ	ジネズミ
堤防とアカシア林		4	11	1	1
湖岸のススキ・ヨシ草原		7	3	3	
マツ防風林	2	3	32	1	14
耕作放棄地			3		
ムギ・ダイズ畑			2		
合計	2	14	51	5	15

潟びと

第一回 八田町

中野 一二三さん



八田町の昔の情景模型を作っている中野一二三さんにお話を伺いました。突然の訪問にもかかわらず、中野さんはご夫妻で快く対応してくださいました。ご自宅の色々なところに作品が保管されていました。(文・聞き取り 高橋奈苗)

Q. つくりはじめた目的やきっかけは？

八田町は潟漁で生計をたてていたが、当時のことを知る人が少なくなっている。言葉ではなかなか伝わらないので、記憶にあるものを形として残せたらいいのではないかと、そんな思いからはじまった。最初は「潟漁」の作成からはじめた。町の文化祭に1つ2つ出してみたら、「懐かしい、今度は何をつくるのか。」など、色々反応があってそれに応えるように作っていた。しかし最近、そんな昔のことをよく知るおばあちゃんたちも亡くなってしまった。

Q. いつ頃から作品づくりを？

現在の家に引っ越してくる前からのことで、32年以上前からになる。八田町には、にしがわ西側、みなみで南出、じゅうさん十三間町、げんまち五番組、ごばんぐみ六番組、ななばんぐみ七番組、ごかまち五ヶ町、なかまち中町の8つの常会があり、以前は五ヶ町にいた。

Q. こなん水辺公園で秋に開催される河北潟自然再生まつり以外でも展示会はある？

ずっと以前から、八田町の文化祭に時々展示させてもらっている。河北潟自然再生まつりは2010年から毎年出すようになった。

〈右ページ下の写真は、2010年に展示された作品〉

Q. これからの展望や願い事がありますか？

最近では昔の川の再現をはじめている。八田道路も川を埋めたところであり、当時の家並みや川の様子を形にしたい。今年も暖かくなりはじめたら、ぼちぼち始めようと思っている。これからも作りたいが、年を取ったので続くかわからない。

Q. 大変なところやこだわりは？

動きのある体の部位を、木で一つ一つ作り、つなぎ合わせてから服を着せていくが、稚児行列では100体ほどつくらないといけなかったので大変だった。それと瓦屋根がやっかいで、瓦を一つずつ作るのは無理なので別の手法をとった。材料の多くは、割り箸やつまようじや布など、ある物で作っているので立派なものではない。最初は、河北潟や八田を流れる川全体を作って配置させたかったが、置き場所がないのでできなかった。

Q. 縮尺がとても正確にみえるが？

作り始めたときは、八田の舟が2〜3艘まだ存在したので、舟の寸法を測って作成することができた。でも、最初はほとんど大体で合わせていた。現在は46分の1の縮尺でつくっている。



かりう
狩打ち (投網漁)
何艘もの舟で協力して魚を追
い込み、投網を打った。



はりあみ つけ
張網 (漬漁)
木材を水中に沈めておき、寄りついた魚を
狙う。張網ではおもにボラを捕った。





ちぎょうれつ 稚児行列

平成15年5月25日。蓮如上人
500回忌法要の行事としてお
こなわれた。



さかた踊り

金沢北部の河北潟周辺集落に伝わる盆踊り。現在は八田
町にだけ受け継がれている。さかた踊り保存会の皆さん
により伝統が守られている。



はさぼ 稲架干し

はさ木を立てて、1本の縄で10段以上つくり、稲束を干
した。道幅が狭いので、支えを片側のみにして、その支
柱の上から針金で補強するかたちが八田では多かった。



潟漁に向かうところ

権^{かい}で漕いで漁に出る。3人で乗ると速い速度で舟が進ん
だ。右側は雨降りのときの格好^{かさ}（笠、蓑）。



かりも 狩持ち（四つ手網漁）

右奥の舟が、舟板を叩きながら進み、四つ手網を持って
待機する側へ魚を追いついていく。



今回から、新しく『潟びと』
のコーナーができました。
河北潟に慣れ親しんできた
潟びとを訪ねてインタビュ
ーしていきます。よろしくお
願いします。
中野一二三さんの作品を
見ていると、ぐっとその世
界に引き込まれます。躍動
感のある人の形、事細かな
細工、全体の雰囲気、「頭
の中にあるものを形にした
い。」、当時の様子を再現し
ようとする中野さんの情熱
が伝わってきます。

泥んこ・ずぶめれ・稲刈り奮闘記

田崎 和江

9月7日（土）朝7時、私の住む戸室山の裾野は今日も雨。今夏の猛暑の後には、実に雨が多く、その日も豪雨・雷・がけ崩れ。「こんな天気でも稲刈りはやるのかなあ、でも河北潟のあたりは晴れているかも?!」などと考えを巡らせる。河北潟湖沼研究所発行の2013年9月のカレンダーには「見よう見まねでも、皆でやれば何とかなるよ」と、はげかけ（稲架）の写真。このカレンダーはトイレに掛けてあり、常に無言の圧力がある。去年から始めたという手植え、手脱穀など興味は十分ある。福島の仮設住宅の皆さんの笑顔も浮かぶ。

「やっぱり行こう!!!」 万全の準備をして、いざ出陣。バンちゃんが送ってくれた地図をたよりに運転するが、8号線を下りたら、案の定水田地帯は広く、何の目印もない。いつものごとく高橋 久さんに電話をして道を訊く。1本道を間違えて逆戻りしたりとやっとの思いで目的地付近まで辿り着いた。「あ、あそこだ!」、はるか向こうに4~5台の車が止められ、その脇で参加者たちが手を振っている。案の定ここには雨が降っていない。



稲刈り用鎌を借りて、前にいる人の「見よう見まね」で稲刈りをする。10株ごとに束ねるというが、手植えのためか、1株の太さがまるで違う。10株が15株ぐらいになることもあるし、時々数え忘れる。「まあ、束ねる人が調整するだろう」と勝手に解釈しながら仕事を進める。実際には調節されることはなく、太いものや細いもの、そのまま掛けられていったのだが。雨後のため、稲は倒れて刈りにくいし、土は軟らかいし水も溜まっている上に、隙間にはひえや雑草も生えている。西川さんから、ひえは来年また出てきてしまうので、根から抜いておかないとダメとの指示がでた。私

は中腰になり一株一刀のもとに、元気よく刈り始めた。鎌は新しくよく切れ、気持ちいいように刈った稲の山が増えていく。周りの人に負けてはいない。一度に3株を一握りしても刃がいった。ところが、30分もすると一株一刀とはいかなくなり、2~3回で1株を刈る。一握り1株ずつと刈る速度も勢いも落ちてきた。中腰からしゃがみ込むようになり、お尻も濡れてきた。時々腰を伸ばし背伸びをする。見ると西川先輩も休んでいる。他の人は山になった稲を紐でくくっている。なるほど、刈り取り作業のみでなく、他の作業を間に入れるといいのだと気付いた。バンちゃんは写真を撮ってまわりながら、やっと「休憩しましょう」の声をかけてくれた。



はげかけが出来るくらい稲が刈られたあと、田んぼの中に鉄骨と竹（能登から運んだ立派な真竹）が運び込まれ、組み立て作業が始まった。ぐらつかないように足で脚立をおさえ、大型の木槌の受け渡し作業が私の仕事。ここでは自分の仕事と出番は自分で作るのだ。誰も命令・指図しない。やる気満々の素人参加者たちは、唯一の専門家である西川さんの指導に従い黙々と作業をする。鉄骨を埋める深さ、幅の取り方、風の力で埋まって行く分も考慮して、横にも一本入れる。バンちゃんが机上で計算した設計図とは少し違うらしかったが。頻りに器材を運搬し出入りをするので、田んぼの中は小豆のあんこを煮詰めているような状態になってきた。脚立もめり込み倒れ掛かるのでしっかりと両側で支える。下ばかり見てるとポールや竹が曲がっており、傾いてくるので、西川先輩の遠くからの指示が大切だ。



いよいよボールの間に竹を4本横に渡す作業に入った。去年は1本ずつ、縄でとめたという。今年は西川先輩の指導で、1本の縄で4本の竹を留める技を教わる。まず、縄の長さは両手を広げて4幅取り、二つに折り、その先端に2つの輪をこさえ、ボールに通す。2本の紐を縦に竹に引っ掛け、横に渡し、下にくぐらせ、また上に持っていく、簡単そうだが、2〜3回やっても覚えられない。確かに完全に長く太い竹がしっかりと組まれていく。たいしたものだと皆感心する。竹は上から下へと設置し、その間隔も25cmと厳格だ。しかし、高橋さんは懐疑的でバンちゃんに実際に稲を掛けて見させたところ、きちんと下の稲に上の稲がかぶさることが分り納得した。高橋さんは一連の作業を見て、「去年と比べて、早いしきれいだ！」と2〜3回は言っただろうか。

その横では、手の空いている人が、午前中に刈った稲を竹に掛ける作業に入った。ぐずぐず・べたべた・どろどろの田んぼの中を行き来するので、田んぼの中の土はいよいよ泥沼状態。雨が激しく降り始め、体は上から下まですごい状態。3〜4人が田んぼの中を往復するよりは、稲をリレーすればよいと考えて、私は道路に上がり、稲束を手渡す作業に入った。すると作業は断然早くなり、泥にはまる回数も減り順調に完了し

た。稲を竹に掛けたらボールが重さで傾きかけて、大急ぎで支える棒を設置した。その時点で3時半を過ぎていたので、私は一足先に失礼し、車の陰で、傘をさしながら着替えをして車で帰宅した。近所の温泉銭湯しあわせの湯に立ち寄り、たっぷりの湯に冷えた身体を浸し、心地よい疲労感と達成感を感じながら瞑想したのであった。「ああ、幸せな一日であったなあ。」

七豊米はこうしてつくってます

田植え前の準備

土水路の補修・畦塗り

七豊米の田んぼ横には土を素掘りしただけの水路（土水路）があります。土水路が土砂で埋まらないよう、鍬などを使い手入れします。また、田んぼから水漏れしないよう畦に泥を塗りつけて、穴やひび割れができないようにします。

田起こし・代かき

田起こしで田んぼの土を耕します。土を細かく砕き、やわらかくします。代かきで土を平らにならして、水管理をしやすくします。これで田植えの準備がととのいます。

クワを使う



地味にきつい作業



トラクターで

どろんどろん耕す

田植え みんなで協働作業♪

七豊米の田植えは、「田転がし」で印をつけ、そこに手作業で一苗一苗ていねいに植えていきます。



手で植える

農薬は使いません

草取り

七豊米の田んぼでは殺虫剤や除草剤などの農薬はつかいません。雑草が生えてきたら手で抜き取りします！



殺虫剤・除草剤使いません！

稲刈り・ハサ干し

手鎌とバインダーを使って稲刈りします。そして刈り取った稲はハサ干しします。



約一週間かけてお日様のちからで自然に乾燥〜※

稲刈りしてから食べられる状態のお米になるまでけっこう手間がかかります

脱穀

ハサ干した稲束から、稲穂についているお米一粒一粒をはずします。このお米を「籾米（もみごめ）」といいます。



↑脱穀機で脱穀します。

籾米→もみごめ

もみすり

籾米から籾殻をとりぞきます。籾殻はお米を包んでいる皮です。もみすりして皮がむかれて、玄米になります。



←籾殻もみがら

もみすりをしてやっと食べられる状態に。↓

→玄米→げんまい

七豊米 玄米

精米

玄米からぬめりや胚芽をとりまします。七豊米ではお米自体の重さを利用して優しく精米する循環式精米機で精米しています。



時間をかけてじっくり精米

→精米→せいまい

七豊米 精米

＜「七豊米はこうしてつくっています」作成 番匠尚子＞

河北潟自然再生まつり2013

今年で4回目を迎えた河北潟自然再生まつりの開催当日の10月20日は、冷たい雨が降っていました。



それでも約200名の方にご参加いただき、たいへん有意義で楽しいイベントとなりました。

残念ながら芝生広場への出足は、雨のためとくに悪かったのですが、新しい2チームからの出展があり、ホテルのクイズと自然のものをを使ったクラフトといったとても良い企画でした。きっと来年も企画を用意していただけるものと思います。

雨の中でも、こなん水辺公園救援隊のメンバーがヨシ舟の企画を実施し、多くの方に試乗していただきました。セイタカアワダチソウの草木染めは昨年にも増して好評でした。室内のイベントとして、ポスター展示と昔の河北潟の日常風景のジオラマは、じっくりと見ていただくことができました。

野菜の販売コーナーは、出展者が増え好評でした。

近江八幡市議会からの視察

10月1日には、滋賀県近江八幡市議会の方々10名が、河北潟に視察に訪れました。河北潟湖沼研究所が視察の受け入れ団体となって、ビオトープやこなん水辺公園、干拓地などを回りました。また、河北潟沿岸土地改良区、河北潟干拓土地改良区には視察の説明をお手伝いいただきました。

市議会の方々は、河北潟での観光振興や自然環境保全の取り組みについて、大変興味を持たれ皆さん熱心に質問されていました。



七豊米を販売

河北潟地域の野生生物と生態系の保全と、持続可能な農業のためのブランドづくりのために、手植え、手刈り、稲架干しなど、7つのこだわりつくった協働作業の米を「七豊米」と名付け、作業参加者のご了解をいただき、試験的に販売しています(6ページ参照)。今年度の販売実績をつくり、来年度の米づくりに参加いただける農家を募っていく予定です。

とても味わいがあるしっかりした米と評判が高く、なかなか味わうことができない完全手作りの幻のお米をいちど試してみませんか。ネットショップ「河北潟湖沼研究所のお米屋さん」(<http://kahokugata.cart.fc2.com/>)にて購入できます。



福島に

お米と果物を持っていきました

福島県南相馬市の仮設住宅団地で避難生活を続けている方々との交流も3年目となっています。この秋も河北潟干拓地の果物と仮設住宅の方々の要望が高かった米を持っていきました。既に、福島県内でも米の生産や果物の出荷が始まっており、本来これらは福島県を代表する農産物で、放射能の検査も行われ安全性も確認されております。しかし、福島に残っておられる方々は、普段食べるものに対してたいへん敏感になっており、まだ県内産を食べるのは避けたいという方が多くおられます。また、これまで稲作農家だった方は、親戚や遠く離れている家族に自分の作った米を送ってきた習慣があり、購入してでも自分から安全な米を送り届けたいと思っている方も多くいらっしゃいます。そのような要望があり、河北潟の野菜を届ける活動にあわせて、米を運ぶことにいたしました。福島はまだまだ先が見えない状況が続いています。私たち活動も物を運ぶことから心を運ぶことにシフトしつつ、できる限り継続したいと思っています。みなさまのご支援をお願いいたします。



編集後記

ロハスフェスタへの出店など、これまでに行ったことがない活動を始めています。都会の方々との交流を通じて、河北潟湖沼研究所と河北潟の将来に何か新しい可能性が見出されることを願って活動しています。(T.)